

幼児造形表現教育における授業実践報告

—スパッタリングによる表現方法と考察—

吉 垣 隆 雄*

A teaching practice of model expressions in early childhood education

—An expression method by the sputtering—

Takao Yoshigaki

【キーワード】 造形表現, モダンテクニック, スパッタリング
Artistic expression, modern technique, sputtering

はじめに

幼児教育を学ぶ学生にとって、教育現場で直面する幼児・児童期の造形表現活動において「指導」および「援助」とは何か、どのように支援していけば子どもたちに「作ることの楽しさ」とともに「表現力」の向上や子どもたちが「おもしろい」・「もっとやりたい」という気持ちになって活動していくのか、そのためには保育者および指導者に造形表現活動の際何が必要なのかということをもダンテクニックのひとつのスパッタリングの技法に焦点をあて実践演習した内容を取り上げたのが本報告である。

1. 問題の所在

1) 短期大学における造形教育

今日、造形教育は、広範囲にわたる造形表現活動を手がかりとしながら表現対象としての自然や造形物を素直に感じ取り、これを表現することで表現力や創造力を高めながら、その過程や結果（作品）をとおして社会と個人の関わりの中で人間性を育て豊かな心情や情操を養うことを目標としているのはいうまでもない。幼児の造形活動の芽生えは木の葉や花をつんで飾ったり、石ころや木片を積み重ねて遊んだりしているところに見られ、これらの行為は子供にとっ

所属および連絡先

* 大阪千代田短期大学

である種の実用デザインの出発点といえる。すべてものをつくり出す造形活動は、まずどのようなものを形づくっていくかという発想を出発点とし、手先の訓練や既成の技法をおしつけるのではなく、子どもたち自身が日常の生活のなかで何かを発見し、ひとつの経験をさらに次の経験へ役立たせ、いつも新しいものへと発展させてゆくことを考えたい。子どもが本来持っている芸術性、創造性を育てていくこと、そのためには無意識的な遊びの形から感覚やそれにむすびついた技術の学習が意識的、計画的に積み上げる方向ですすめたい。それには、子どもたちと造形活動で関わる指導者自身の造形に対する感性を高めていくことが大切である。

ところが残念ながら、幼児教育を目指す学生だけではなく、現場で日々指導や支援に携わっている幼稚園教諭や保育士および小学校教諭の中に造形や図画工作が苦手という指導者も少なくない。本学の幼児教育科に入学した学生に「造形表現Ⅰ」の初回の授業でアンケートを取った際、図画工作や美術が苦手な分野であると回答した学生が相当数いた。また、本年度（2017年度）8月と11月に本学において実施した幼稚園教諭・小学校教諭対象の教員免許状更新講習（選択講座）で筆者が担当した「造形表現・図画工作の理論と実践」の講習において事前に実施した意識調査では、講習を希望した理由に「自身が図画工作は得意でない」という苦手意識や不得意さなどの意識も目立った。¹⁾このことは、本来、幼児や児童にとって造形表現の根幹となる思いや願い・発想が楽しく現れる造形表現活動であるべきはずが、保育者・指導者の苦手意識から十分に表現に反映されないといった危惧から、支援の仕方から具体的な指導方法までが教員の目の前にある重要な課題として捉えることができる。また、幼児の造形表現や児童の図画工作教育に際して教材や技術的な面も含め、表現内容に対するニーズも高く、日頃の保育や教育実践上の問題や課題を反映している。「あきっぱさで『もうおしまい』と早々に終わらせる園児がいる。」、また小学校教員からは子どもたちが表現したいものがうまく表現できないために「あと一步というところでやめてしまう子にどんな手立てをすればよいのか」など幼児の造形表現や児童の図画工作教育に際して困難さを感じる子どもたちの現状も垣間見ることができた。

子どもの造形表現活動の中で表現意欲を無くさせないためにも「表現したいものを表現する」、そのためには技術力の修得や表現手段・表現方法というも大切な要素であり、その子どもたちを支援していくためには、指導者自身が造形の楽しさを充分に感じることで、そのための表現の表現力や表現手段・方法のスキルアップが必要であると考えられる。

2) 実践研究の方向

「あきっぱさで『もうおしまい』と早々に終わらせる園児がいる。」との現状の実態を前節で紹介した。実際、子どもの生活に密着した場合に、現代社会は物質面での充足とそれに伴う情報化の氾濫がすさまじく、一方的に与えられる中で十分に吸収しきれず表面的に子どもたちの心にとどまり、価値観が十分に形成されないという皮相的な状態にあるといえる。そ

のことは、一つのものごとに執着してまでも感動を追及しきれないという姿勢となって現われることがある。

子どもは「遊び」を通して育つが、成長に伴い徐々に表現活動においても知的リアリズムが芽生えていき、技術面での未熟さから表現したいものを「うまく表現できないこと」やそのために意欲をなくしている子どもたちにどうすればよいかという問題も現実には見逃せない。筆者が公立中学校で美術科を担当していた際、中学生になったばかりの子どもたちに図工や美術に関しての発問を投げかけると、「あまり好きでない」、「嫌いだ」、「面白くない」などといった答えが相当数返ってくる。理由を聞くと— うまく描けないから…とか — 絵をかくのが嫌いだから…、— 面白みがないから…—といった回答が非常に多かった。成長過程から見れば小学校において高学年になるにつれ知的リアリズムが芽生えてくるが、表現活動において技術面での未熟さから表現したいものを「うまく表現できない」子どもたちにどうすればよいかという点に注目した。彼等は小学校高学年から中学校3年間で驚くほど肉体的・精神的成長を続け、「もの」に対する見方が次第に写実的になり、客観的判断（相対評価）を下すようになるため、その中で結果として表現技術が伴わないことが作品に現れてくるのが表現意欲消失に大きくつながっていくのである。そういった点や、前述した現在の彼等の価値観も含め、中学生位になると、自分の作品を追究する意欲や持続する気持ちを継続させることが難しくなる場合も生じてくる。しかし、こうした背景の中でも、いやこうした背景があるからこそ子どもたちの『遊び心』を刺激し、彼等の「表面的価値観」を逆にくすぐるような題材設定と展開を考えてゆく必要性を感じて、教材研究を行った。ただ、このことは、題材がいかに重要かということの意味するものではない。確かに題材は興味、関心をひき、表現の意欲をかきたてる意味でつまり動機づけのキーポイントではあるが、題材そのものが成否の鍵をにぎっているということではなく、大切なのはひとつの題材の中でいかに彼等の『遊び心』を刺激してゆくか、身近に迫ってゆくかということであり、またその活動過程の中で意欲的な動機を生じさせるかまた高めるか、その結果が満足感につながってゆくかということではないかと考える。

筆者は過去に中学校美術科の授業について「第43回全国絵画制作・図画工作・美術教育研究会」の中学部の発表会において「制作過程の中に『3つのこだわり』（・遊びの要素、・楽しめる制作、・満足感のもてる作品）を持って創造するデザイン」と題した実践報告を行った。そこでの経験も活かし報告発表した経緯から幼児教育現場で指導者に必要な表現力のスキルアップ活用し、モダンテクニックのひとつであるスパッタリングによる表現方法を取り上げ、本学学生への造形表現活動の授業において実践することにした。

2. スパッタリングを用いた教育実践

スパッタリングのみで描いたイラストレーションについては前節で述べたが、その実践は、指導者である筆者自身が初めて設定・実践した題材でもあった。エア・ブラシの様な効果を持つ作品を子どもたちが簡単な方法で表現できないかというのが取り組んだ原点であったが、淡彩やポスターカラーなどの（筆を使った）ベーシックな彩色技法や細かな計画性から離れ、描画に対する技術的な面をカバーできるとともに、未知の面を「遊び感覚」で楽しみながらその時々で対象に対して自在に対応して制作してゆくことを重要な過程とし、その過程で生まれた成果（作品の出来）に満足感が持てることを目標にして実践したものであり、表現のための知識や表現技術にあまりとらわれることなく、発想の斬新さや個性を個々に発揮でき、しかもデザインとしての美しさ（大衆に語りかける装飾性）をもつ作品作りに重点をおいた。

この点については、本学の造形表現の授業だけでなく、教員免許状更新講習においても現場の保育者や教員の「楽しい」、「面白い」、また「造形に対する（表現力が伴う）苦手意識」を払拭することなど、基本的には同じの目標に基づいて実践するに至った。

スパッタリングという技法は、金網の上から絵の具をブラシにつけてこすり、ぼかしや図柄を作る方法であり、一種の孔版画である。型紙を置くことにより（マスキング）図柄の一部が現れることから、意図的に形を作っていくことができる。ただ、マスキングして図柄をデザインしていく際も、あえて計画的なものではなく偶然に出来たものを鑑賞しながらさらに生まれてくるアイデアを加味して次の表現へと発展していくという方法をとることで制作を楽しんでいくことを主眼とした。

「造形表現Ⅰ」の授業では、表1に示したシラバスに沿って、描画や作品制作において「遊び」の要素とともに偶然にできる形や色を利用した効果や「造形表現力」の手助けとなる技法としていくつかのモダン・テクニクを実習（シラバス5～10）したわけだが、これらも大きくはスパッタリングの授業の導入段階のひとつであり、この延長線上にあるモダン・テクニクのひとつとして（シラバス13・14）演習を行った。中学校の美術科の授業において、知識として学習したであるとか表現の一部として部分的に活用したことがあるという学生もいたがわずかであり、初めて体験した学生が多くいたことに筆者も驚いた。この授業については、図3に示すような流れで授業展開するようにした。

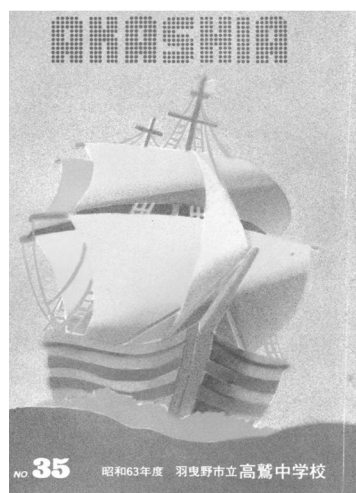


図1 スパッタリングによる描画作品
羽曳野市立高鷲中学校卒業文集表紙
(H1発行)

表1 「造形表現Ⅰ」(前期) シラバス (筆者作成)

大阪千代田短期大学幼児教育科「造形表現Ⅰ」(前期)シラバス

〔目的と概要〕

幼稚園教育指導要領、保育所保育指針における領域「表現」の狙いと内容をふまえ、造形の基礎的な知識と子どもたちの造形活動を支援するために保育者として必要な造形表現力と感性を高める。

〔到達目標〕

造形活動を体験することで多様な素材の理解と技法を習得し、豊かな創造性と感性を養う。

〔評価方法〕

出席・授業態度・提出物(課題作品、ワークシート、小テストなど)等で総合評価する。

実施月	回	授 業 概 要
4 月	1	オリエンテーション、造形表現について、課題(パフェ)
	2	幼稚園教育要領・保育所保育指針における表現
	3	子どもの絵の発達と保育者の関わりおよび課題
5 月	4	色彩学習Ⅰ「色の基本と三属性」
	5	・色彩学習Ⅱ「色の感性」 ・モダンテクニック <デカルコマニー> <にじみ>
	6	モダンテクニック <ドリッピング> <フロッタージュ>
	7	モダンテクニック <マーブリング> <スクラッチ(塗込み)>
	8	モダンテクニック <マーブリング> <スクラッチ 2(描画)>
6 月	9	モダンテクニック <コラージュ> 「三角形で遊ぶ」
	10	モダンテクニック <コラージュ> 「円形で遊ぶ」
	11	観察実習に向けて 幼稚園での掲示物の制作
7 月	12	実習報告(造形レポート)、講義「幼児の造形」
	13	モダンテクニック <スパッタリングで遊ぶ>
	14	スパッタリングによる作品(描画)制作
	15	・「学びの確認」テスト・夏季課題「折り紙ノート」制作説

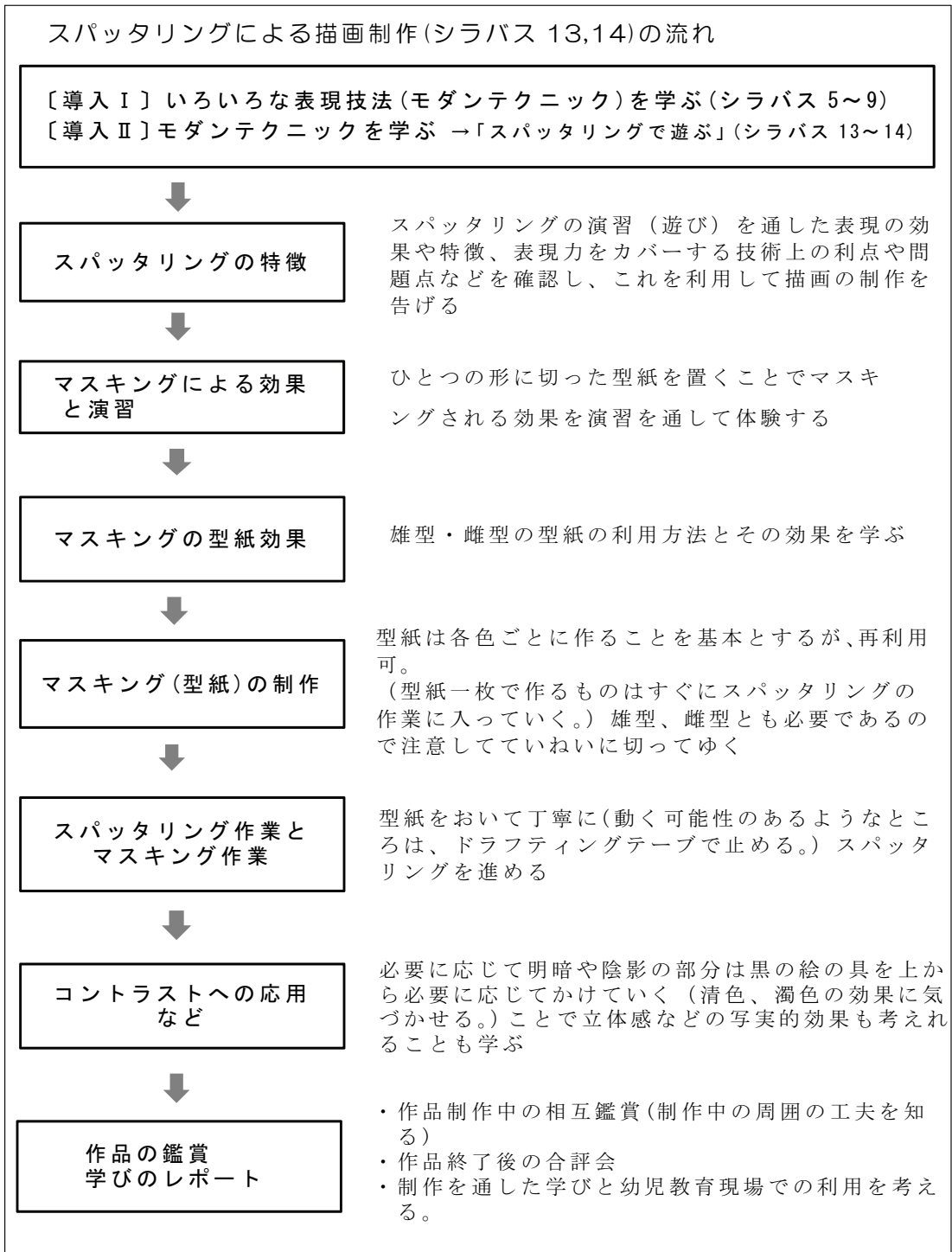


図3 スパッタリングの授業展開(筆者作成)

初めは、特に条件は何も設定せず、『遊び』としての各自が思うように点描表現を楽しんでいくという行為を中心に行った。画面上に表現されていく点描の美しさや面白さに思わず「きれい」という声の実習教室のあちこちで聞くことができた。

次の段階では、単純な形に切った型紙をひとつ置くことによる飛び散る絵の具の一部がマスキングされ、その形が画面上に現れる効果を確認した。さらに型紙を作る際の雄型・雌型の両方に着眼し、どちらも使用していくこと、雄型による形の部分が色の隠される場合、雌型によるその形の部分が彩色される場合の2つの効果を確認するようにした。

次にひとつの同じ型紙を彩色しては別の場所に動かすことで出来る一種のパターンデザインや模様や中間混合による混色を行った。(図4)

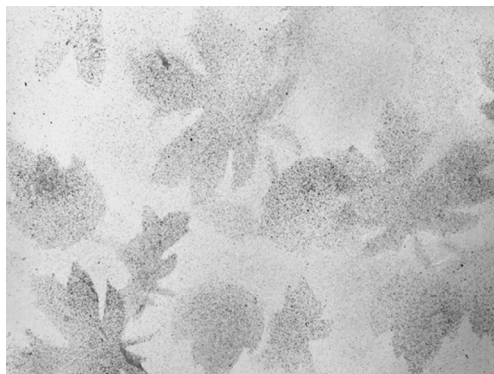


図4 学生の作品
(大阪千代田短大 筆者撮影)

形に応じた型紙制作を行い、雄型と雌型の型紙を使って制作に取り組んだ。また、出来上がってきた点描表現の印象に応じてさらに型紙を作成していくことも可とし、作品制作を楽しみながら浮かんできた発想をさらに表現に取り入れていく過程も大切にしたい。型紙などに工夫を凝らして、切り抜いた雄型・雌型を双方使い、神秘的な具象形の表現ができること、筆で描く様な彩色技術がなくても美しく仕上がっていく作品に制作の充実感と自信が現われ、当初は単純なマスキングから次第に複雑なものまで考えはじめ、その影響で周りが更に全体的に高まっていくのと同時に少しずつ作品が出来上がってくるにつれ、作品を大切に扱いながら、慎重に次の作業展開を続けていくといった意欲的で積極的な態度に変わってきた。(図5)



図2 学生の作業風景
(大阪千代田短大 筆者撮影)
2017年7月

型紙を作成するときに雄型と雌型の両方を使うことでアイデアが発展することを伝え、授業の最後には、次回の授業でこのスパッタリング発展的に使うことで、描画表現していくことを筆者が過去に中学生に実践させた作品を示しながら予告するとともに、作ってみたい形をいくつか考案してもらうように指示を行った。

次の授業では、前回授業のポイントを再確認し、八つ切り画用紙1枚に考えてきた

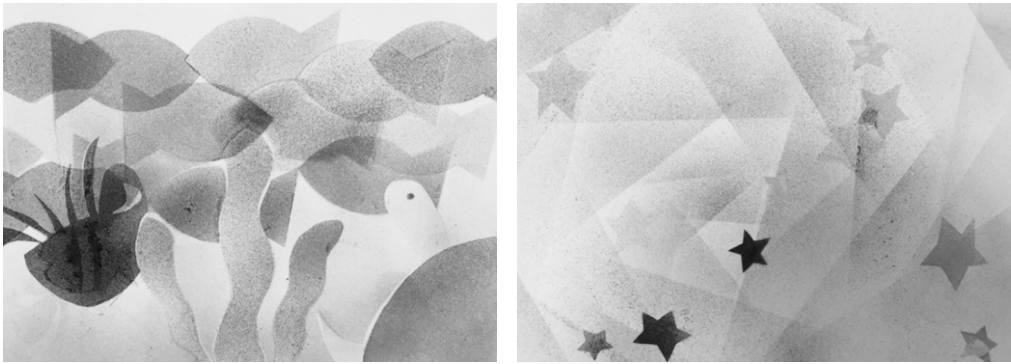


図5 学生の作品
(大阪千代田短大 筆者撮影)

3. 考察

スパッタリングによる色の混色は、「中間（並置）混合」と呼ばれるものである。事前に基本として色彩学習の授業において、絵の具やインクなどの混色による「減算混合」や光のような「加算混合」、回転や並置による「中間混合」どの学習はしていたが、通常の描画などの際の混色によって明度や彩度が下がってしまう減算混合に比べ、このスパッタリングによる点描表現を使うことで彩度や明度が失われにくい中間（並置）混合による混色の効果と美しさを実感することができることも利点である。また点描法（新印象派）の学習へとつながりこともできる。制作ではあえてその中間混合を意識化してはいないが、画面の一つの場所を一色のみでスパッタリングすることは出来るだけ避け、複数の色をかぶせてゆくように指導助言した。（その行為を行うことで明度や彩度が低くなりにくい中間混合のことを認識させるようにした。）学生の中には、色料の三原色にもとづき青と黄の絵の具を各々スパッタリングして緑の色を出そうとした者もいたが、近くで見ると見えづらいこともあり、画面上で中間混合せず、パレット上で混色した色をスパッタリングしていたが、特にその点にこだわってはいない。また、白の画用紙上に吹きかけられた純色が必然的に用紙の白さとの混合によりパステル調の明清色（純色+白）となって現れることに、美しく幻想的な空間表現になることを見出し、筆を使う描画表現よりも容易に作れる「ぼかし」表現も多く見られた。作品は単調なものから複雑なものまで実にバラエティに富んでいたが、画面の美しさ、混色による鮮やかさ、またコントラストによる立体感など「仕上がりの美しさ」という意味ではほとんどの作品が技術面の優劣を感じさせないものであったし、なによりも楽しみながら前向きな態度でさらにお互いの作品や表現方法を鑑賞することで表現意欲をさらに高めあって制作に励んでいた。

問題点としては色を変える際、筆とともに使用した金網もきれいに洗って古布などで丁寧に水分を拭き取る作業に手間を要すること、マスキングの作業時には、すでに塗布した点描が乾

かないうちは型紙を置けないといった乾燥時間の制約、型紙が複雑なものに対しては時間的に大きな比重を占めるなどで2回の授業時間では十分に補償できなかった。また、マスキング時の型紙クロッキー用紙が最適であったが、水分を含むとどうしても生じる若干の反り（周囲のぼかし効果を考えるとこの反りも効果的である）などがこの教材の課題としてさらに検討を重ねたい。

最終の『学びのレポート』では「楽しくなって造形の自分の苦手意識を払拭してくれた」「出来上がっていく作品から次々と新たな発想がでてきた」「実習で使ってみたい」などの感想が書かれている。²⁾

この題材はデザインにおける表現の拡がりを知ると同時に表現上での手助けとなり、条件や制約、計画にこだわることなく柔軟に対応していくことでそれぞれの学生の能力・個性に応じていくらかでも発展できる点を持ちあわせており、造形表現の題材としては適切であったと考える。

おわりに

学生は、このスパッタリングという単調な作業から表現される成果を見て、さらに次の表現へと発展させるという制作の充実感と美しく仕上がっていく作品に満足感を感じていたようである。

幼児教育現場では、教育（保育）に携わる一人ひとりが現場での実践において、子どもたちを取り巻く環境や幼児観、日々の保育の場に寄り添うことをとおして、子どもたちが「何を学ぶか」「どのように学ぶか（アクティブ・ラーニング）」「何ができるようになるか」という方向性を模索する中にあるとともに教材研究をとおして指導者としてのスキルアップや意識改革、感性や表現力の向上と筆者は捉えている。この教材を含めたモダンテクニックを各学生が幼児教育現場で造形教材としてどのように活かしていくか、発展させていくかの考察材料になればと考える。

<注>

- 1) 2017年度本学実施「教員免許講習『造形の理論と実践』」受講者106名中約23名が「図画工作が得意でない。苦手である。」と答えた。
- 2) 2017年度「造形表現Ⅰ」の授業後、受講者に実施。87名中74名の学生が教材に対し、苦手意識の解消につながったと答えている。

<引用文献>

吉垣隆雄「第43回全国絵画制作・図画工作・美術教育研究会」中学部実践報告集「制作過程の中に『3つのこだわり（遊びの要素、楽しめる制作、満足感のもてる作品）』を持って創造するデザイン」、1988
吉垣隆雄「幼児・児童の造形表現活動の一考察」『大阪千代田短期大学研究紀要』第46号、2017